

30 : ガレガ草地の造成年における植生調査

畜産科学科 植物生産科学分野 堀川 洋
 畜産フィールド科学センター 池滝 孝
 別科 上野 翼・佐藤昌之・鈴木健二

メールアドレス horikawa@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】 ガレガは新タイプのマメ科牧草としてエストニアから導入され、3年前より品種「こまさと184」が市販されている。ガレガは地下茎で繁殖するため耐寒性・永続性が極めて高く、栄養品質も優れるため、北海道の粗飼料生産にとって非常に魅力ある特性を備えている。しかしながら、ガレガは1年目の初期生育が非常に緩慢なため他の混播草種や雑草との競合に劣るので、草地造成年におけるガレガの定着が栽培面の最重要課題と考えられる。そこで本研究では、草地造成法の違いによるガレガの定着について調査した。

【方法】 畜産フィールド科学センターの実験農場において、チモシーとガレガの混播草地を慣行播種法と除草剤処理同日播種法の2方法で造成した。植生調査は、各草地に6個の1m×1mのコドラートを設置し、H15年6～10月まで毎週行った。掃除刈りを兼ねた1番草刈取りは慣行区で7月14日、除草剤処理区で8月12日、また2番草刈取りは両区で10月21日であった。

【結果】 造成初期の植生は、慣行区ではシロザ・ヒエ等の雑草量が非常に高かったが、除草剤処理区では雑草量が半減していた。ガレガの個体数は、慣行区では造成初期から20個体/m²と非常に少なく、秋にはわずか2個体/m²のみとなった。一方、除草剤処理区では初期から90個体/m²と高く、掃除刈り後も60個体/m²を維持していた。植生割合を乾物重で見ると、慣行区では1、2番草ともに雑草が圧倒的に多く(87%、84%)、ガレガは皆無に近かった。一方、除草剤処理区では各番草で雑草が47%、32%、ガレガは4%、11%であった。

以上の結果から、除草剤同日播種法は雑草抑制効果が大きく、1年目のガレガ個体数を確保する上で非常に有効な草地造成法であることが明らかにできた。

発表論文： 「ガレガ草地造成方の比較」、堀川 洋・池滝 孝・塚本孝志・岩淵 慶、
 北海道草地研究会報 38巻、78(2004)
 「ガレガ草地造成方の比較」、上野 翼・佐藤昌之・鈴木健二、
 平成15年度、帯広畜産大学草地畜産専修 特別研究報告 第18号
 28-30(平成16年3月)